BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

日本洋書協会会報

Vol. 33 No. 11（通巻390号）1999年11月

1999年フランクフルト・ブックフェア

10月のフランクフルトは雲に覆われた日が多く、時には冷たい雨に見舞われることも多いのに、今年は到着した日から毎日快晴に恵まれ、マイン川沿いの半ば紅葉した樹々も高く透き通った青空の下でいつになく鮮やかに見えた。

今年のフランクフルト・ブックフェアは10月13日から18日までの6日間開催され、例年と同じように英米およびヨーロッパを中心に世界各国からの出展・参加で賑わった。しかし、書籍や雑誌を出版し販売して行くというベースは共通でありながらも、その中で変わらぬものと変貌しつつあるものの両面が感じられた。ここ数年世界の出版界を席捲し続けてきたコングロマリットによる出版社の吸収・合併についていえば、今年もフェアまでの間にGaleやPearsonなどによる買収があり依然としてM＆Aの波は続いているが、巨大資本によるこうした出版事業の集中化は、最近の日本における企業統合の動きをみるまでもなく、グローバル化してしまった市場で自らの競争力を強めるための必然の選択であろう。

メデアの変化に関しては、当然のことながら自然科学分野の学術雑誌を出している出版社や加工・流通業者（アグリゲータ）によるonline-journalの紹介が目立った。書籍の領域でもその出版内容によってはオンラインで提供を開始した所や計画中の所も多くなっていて、従来印刷体とオンライン版の中間的な媒体とみなされてきたCD-ROMは欧米では急速にその役割を終えつつあるとのことである。Bookの分野では、活版印刷の開始以来、絶版になれば古本の市場で探すより手がなかったが、ここに来てon-demand-publishingで自社出版物を提供する所が次第に多くなっている。取次店でも同じようなサービスを開始しており、日本でも日販やトーハンがオン・デマーンド出版を始めるというように軌を一にしている。ハードの値段が大幅に安くなり、採算が合うようになったという事情がこうしたon-demand-publishingを可能にしていることは言うまでもなく、ドイツ国内の出版社が入っているHall NO.6では、ゼロックスのドイツ支社が広いスペースを取ってon-demand-publishingのデモを行っていた。いつか遠くない将来、我々の業界用語の中から絶版という言葉が消えてしまう日が来るのだろうか。

変化といえば、もう一つ世代交代についても言える。何十年もの間英米や独仏の出版社の海外販売部門で働き、我が洋書協会の会員の方々にも馴染みの深い、何人もの人々がここ数年の間にリタイアし若い世代に道を譲っている。安定していた時代から新しい時代へと急激に変わる移行期には人もまた代わっていくのが自然の成り行きなのかも知れない。

フェアでは各所で、Amazon.comに代表されるインターネット・ブックショップの出版社及び書店に対する影響についても、ここ数年間のドラスチックな変化の一つとして話題になった。特に日本市場への影響について

目　次

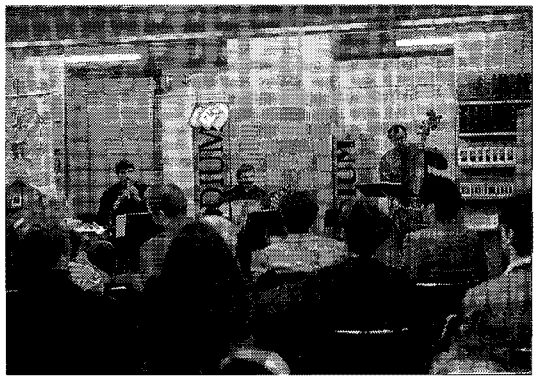
フランクフルト・ブックフェア …1・2
理事会・委員会報告……2・3
うちの会社 ……3
海外ニュース ……4
出版文化史逍遥(40) ……5
花火大会―昔・今・この先― …6・7
広　告 ……8

欧米の出版社は関心を持っているようであった。既に経済の世界ではナショナル・ボーダーが消滅しグローバルな市場になった今日、欧米の出版社もそうしたinternet-bookshopの影響を視野に入れた事業の進め方を真剣に考えているようである。

21世紀になっても印刷体の書籍・雑誌は、そのウエイトはともかく、電子出版物と共存して行くだろうという見方が定着したことによるためではないだろうが、今年のフランクフルト・ブックフェアの印象としては総じて落ち着いた穏やかな雰囲気であった。

ブックフェア期間中の後半は一般の人々にも開放され自由に入ることができるが、今年も赤ちゃんを背負った若いカップルや、小学生の子供達、主婦や年配の老婦人など多くのドイツ人がHall NO.6を中心にしてスタンドの両側の通路に溢れんばかりに訪れ、ドイツという国の人々の書籍に対する深い愛着とその伝統に基づいた強い精神性とを垣間見る思いがした。

〔丸善㈱・**昆野哲郎**〕



〔写真提供：アカデミア-ミュージック㈱　平岩　寧氏・㈱東光堂書店　柴田厚生氏〕

理事会報告

10月22日（金）

1．1999年度上期収支・事務局長報告を了承した。

2．以下の委員会報告を了承した。

事業委員会：

2000年4月開催の東京国際ブックフェアで併催される「オランダ年」書籍展はJAIPが主体となって運営する。洋書バーゲンセールと重なるので、他の委員会にも協力をお願いしたい。

ダイレクトリー委員会：

協会ホームページの作成を正式に発注した。この内ダイレクトリーの名簿及びAGENT LISTを試作した。AGENT LISTを使用している実務者に協力を仰いで詳細な検討に入る。名簿は利用実態に鑑みて冊子体の刊行も考慮する。

会員増強委員会：

入会勧誘候補を絞り込んだので直ちに勧誘活動を実施する。

広報・渉外委員会：

協会PRの一環として、来年の新年賀詞交換会に協会外部から適当な人を招待したい。人選は早

急に委員会が行い、11月の理事会に諮る。

3．日本複写権センター関連事項について以下の報告があった。（西川理事代理）

(1)同センターに対するJAIP申込書を10月1日付けで提出した。

(2)同センターより複写許諾業務に関する双務契約がCCCに提案された。（10月6日）契約が締結されれば1ページ2円で合法的に自由に複写利用が可能になり、輸入業者にとって大きな問題となる恐れがある。

4．共同物流プロジェクト実施へ向けて最終参加募集を行った。参加希望が5社以上であれば実行することとし、見積を提示したうえで実行計画に移る。

委員会報告

＜事業委員会＞　10月13日（水）

2000年東京国際ブックフェア（4月20日～23日）への参加について話し合いを行った。

1. 例年通り洋書バーゲンコーナーを開設することとし、本年末より準備に入る。
2. 特別パビリオン「オランダ館」に於けるオランダ出版物、和洋関連書籍の展示・即売運営を委託された。「バーゲン」に平行する為、他の委員会にも協力を依頼する。また、和書については書協等の関係団体に協力を要請する。

＜会員増強委員会＞　11月10日（水）

1. 当委員会が推薦し、理事会の承認を得た19社に対して10月末に入会招請状を送付した。推薦者は改めて勧誘をフォローする。
2. 推薦企業以外の1社より入会希望があったので受理し、入会手続きを執った。
3. 第2次推薦候補企業を選定した。事業内容の調査、入会意志の打診等を行い、次回委員会で検討することとした。
4. その他候補に挙がった数社について、入会の可能性を探る。

うちの会社

株式会社　タトル商会

神奈川県川崎市多摩区堰　1－21－13
Tel：044－833－0225　Fax：044－822－0413

弊社は終戦直後に英文書籍の輸入販売を始めてより、すでに50余年を経て参りました。この間、洋書業界の発展や曲折に伴って扱い書籍や業務にも幾多の変遷を体験しておりますが、幅広い読者の求めに応ずるために、英米書を中心にフランス書やドイツ書も含めてあらゆる分野の書籍を開拓供給してきたものと自負しております。

洋書を含めて書籍業界全体がいわゆるバブルの崩壊後、さまざまな問題が顕在化してきていますし、オンラインショップをはじめとする新しい業態の出現もみられる昨今、正直に申せば苦戦を強いられる側面も生まれてきていますが、そうしたなかで何ができるか、また何が足らなかったかを、経営陣以下社員全体で考えながら、より緻密に日々の仕事を進め、さらに数年内に訪れるであろう書籍業界の新たなあり方をも展望する意欲にあふれています。

目下、具体的に取り組んでいる課題としては、マーケットの掘り起こし、読者が望んでいる書籍の開拓、仕入れの迅速化と適切化、個々の人員の研鑽、財務状況の改善などがありますが、これらに加えて新たな形の出版活動も模索しています。マンネリを廃し、新たな仕事を開かなければ発展はないということを噛みしめる必要があるような気がしています。本を読みたい、本を買いたいという思いは、人が生きている限り、なくなることはないはずです。この原点を見据えて、さらによりよい仕事とサービスができればと考えております。

雨宮孝行

海外ニュース

旧 Faxon 社長、Dawson 雑誌部門を再買収

RoweCom 社（NASDAQ：ROWE, Richard Rowe 社長—以前、Faxon 社社長で同社を Dawson に売った人物）が Information Quest, Faxon, Dawson Espana, Dawson France, Dawson UK, Faxon Canada, Ltd., Faxon Company, Inc. 及び Turner Subscriptions を含む Dawson Information Services Group を3千万ポンドで買収した。Dawson社はEOSi図書ソフトウェアやIQインターネットを使用する権利と共に雑誌及び書籍取り次ぎ業を続ける。「サブスクリプション・ビジネスの処分により、グループの中核となる新聞、雑誌、書籍にわたる活動における流通技術に集中することが可能になる。このグループは現存の流通ネットワークを利用し、そして拡充する新しい方法を探る。」と、Dawson Holdings Plc（London：DWN. L）の会長である Lyndon Haddon 氏が株主に宛てた手紙で述べている。この取り引きは、Dawson 社の株主の承認を条件としている。この獲得で年間収益で3億5千万ドル以上の増加と RoweCom の粗利益を著しく高め、利益度に加速をつけることが予期される。獲得された部門はサブスクリプションサービス、ウェブベースの電子情報配達、及び図書情報管理ソフトウェアとサービスを含む全ての会社である。このグループは約5百人を雇用し、2万を超える顧客を持ち、そのほとんどがプリントからインターネットに至る総合的な業務を展開する市場にある。Dawson 社の全顧客は最終的に Dawson 社の現行のサービスより RoweCom 社のウェブベースの kStore 又は kLibrary は移行することになる。この Dawson 獲得にはイギリス、フランス、スペイン、カナダ、及びアメリカ所在の9個所の業務を含む。Rowe 社長は、「国際的な取り引きの拡大は e-コマース企業の成功には必須である」と述べている。「西ヨーロッパにおける e-コマースに起因した収益は1998年の約56億ドルから2003年には4800億ドルにおよぶとされる。また、インターネットの開発は将来の成長には絶対に必要なものであり、RoweCom 社の kStore と kLibrary が Dawson の幅広い顧客ベースを維持、拡大するために必要とされるきわめて重要な新風を吹き込むことになるだろう。」とも述べている。

Against the Grain/November 1999

インターネット取引の裁判権

EC（欧州共同体）は e-commerce 法規の改訂を求めているが、これは書店がインターネット上で書籍を販売することを阻害するとして The Booksellers Association（BA＝英国書店協会）が警告している。この改訂により、コストがはね上がり、違法商業行為ということで書店が告発されかねないというのが警告の理由だ。

商取引の視点から見て最も重要な点は、それぞれ異なった国籍の消費者とインターネット書店の間で争議が発生した場合の裁判権に関する問題だ。EC が消費者側に裁判権があるとした場合、本を買った顧客は、インターネット書店を相手どり、それぞれの国の法廷で裁判をおこす権利があることになる。

BA は書店が属している国に裁判権を与えるよう望んでいる。もし裁判権が消費者の属する国にあると、インターネット書店は知らずに他国の法律を侵す危険があり、書店の国では合法な行為でも告訴されかねなくなってしまう。たとえば割引販売による拡販行為も、ある国では合法だが他のある国では違法になる可能性がある。書籍の販売価格を管理することは英国では違法だが、EU 内の幾つかの国では厳格に施行されている。

BA の Mr. Tim Godfray, Chief Executive は、EC が消費者側の裁判権を選択した場合、インターネット書店は想定される訴訟から身を守るために高額な保険料を負担せねばならないだろうと警告する。この経費負担により市場は圧迫され、特に中小規模の書店が打撃をこうむるだろうとも言う。「e-commerce を管理する法律が苛酷なものではあってはならないのだ。」

消費者団体は、購買者の属する国で不正を正すことは基本的な権利だと主張している。しかし、BA の Mr. Godfray は現行の制度でも消費者の権利は守られていると言う。「各国政府と共に形作られている現行の法制度下での、消費者と業者間での訴訟手続法が機能するはずだ。」

THE BOOKSELLER/NOVEMBER 5. 1999

明治初期の目録に見る洋書〔12〕

丸善・本の図書館　鈴木陽二

◆明治16年洋書目録に見る輸入の情況（3）

前後することになったが、ここで目録の全体的な特徴を大雑把に通観してみよう。まず全分野を通して言えることだが、教科書的な出版物が極めて多い。明治初期の日本では自前の教科書がなく、輸入原書を使用するか、あるいは少し時代が下ると原書の復刻が盛んになり、それらを教科書として使用した。

教科書的な英文原書の輸入としては、万延元年の日米和親条約批准使節団がアメリカで690冊ほどの図書を購入しているが、その中には後年教科書として定着するコーネルの地理書やクワッケンボスの物理書などが含まれていた。しかし、それ以前でも長崎経由で蘭書と併せて英文図書が輸入されているので、教科書的な出版物も流入していたのではないかと思う。また、1867年（慶応3年）に軍艦買い取りのために渡米した幕府使節団が購入した20,000冊近い書籍のなかには、コーネルやギョーの地理書、サンダースの英語読本、クワッケンボスの各種教科書、ユーマンズの化学、グッドリッチ歴史書、その他多くの教科書が含まれていた。使節団によって購入されたと思わしきものは幕府旧蔵書目録（葵文庫）に見ることができるが、開成学校に引き継がれて東京大学の蔵書になったものなどもあったと考えられる。慶応3年の使節団に随行した福沢諭吉は教科書を中心にした大量の書籍を購入しているが、その前にも1862（文久2年）に開港延期交渉のための幕府遣欧使節団に随行して、イギリスで多量の書籍を購入している。その機会に当然、英国系の教科書を求めたものと推定できる。福沢がそれら渡航を利用して取得した書籍は慶応義塾や、あるいは全国の洋学校にも流れて教科書として使用された。長沢都先生は明治期に流布した原書の教科書を調査しているが、その研究発表には、日本各地の英語学校の教員は慶応義塾出身者が多かったため教科書採択に一定の型が形成されたと述べている。この論文にリストされた英文教科書の多くは、福沢が外国で購入したものと同種のものであることを考えると、福沢が教育近代化に尽くした貢献が、計り知れないほど大きなものであったことをつくづくと感じさせられる。

明治10年に西南戦争が終結したころから、英文教科書は日本で復刻されたものが出回るようになった。明治10年に「英蘭堂」が創業したり、また、明治13年には丸善が中心となって原書翻刻会社「六合館」を発足させるなどして復刻を盛んに行うようになり、復刻版教科書の使用が広まった。国立国会図書館の明治期目録を見ると、明治期を通して定本的な復刻教科書が多種多様出版されたことが分かる。ちなみに翻訳教科書についてちょっと触れると、原書はもっぱら外国語学校（英語学校）以上で使用されていたが、小学校の場合は翻訳・翻案教科書を使用した。文部省は明治5年に学制を施行し「小学教則」を公布してから教科書の編纂に着手したが、明治7年にはウィルソン・リーダーを田中義廉が翻訳した『小学読本』を刊行した。こういった翻訳教科書は明治10年代になると伝統重視の傾向となり、日本の典籍から文章を流用した国産教科書が主流となっていった。

さて、明治16年のみならず明治期前半の丸善洋書目録を見ると、幕末から日本に流入していた定番ともいうべき教科書が多数収録されており、復刻教科書が刊行されるようになってからも、需要が衰退することなく続いていた様子が分かる。その理由のひとつには、教科書としてだけではなく西洋学術摂取の入門書、つまり啓蒙書としても広く読まれたためであろう。明治16年目録には、地理のコーネルやギョー、歴史のグッドリッチ、ギゾー、バーレイ、クワッケンボス、スウィントン、経済学のウェイランド、フォーセット、数学のロビンソン、トッドハンター、英語学のコックス、ピネオ、クワッケンボス、スウィントンがあり、英語読本では「ニュー・アメリカン」「ロイヤル」、サンダース、ウィルソンなど、ロングセラーの教科書が見事に揃っている。明治の教養人や学生はこれらの本によって西洋の知識・先進的な学問を吸収したもので、英文教科書はまさに文明開化を推進した図書であった。〔参照文献：石原千里「万延元年遣米使節一行の将来本について」『英学史研究』第14号／長沢都「日本見在英語教科書志」（上）『戸板女子短期大学研究年報』第9号／木村毅『丸善外史』／海後宗臣『図説教科書の歴史』〕

花火大会

－昔・今・この先－

島岡　丘

桜川は筑波山麓から学園都市のほとりを通り、日本第二の広さをもつ霞ヶ浦に流れ込む。この桜川の河口近くで毎年10月には花火が打ち上げられる。花火はその数2万発と言われ、2時間にわたって打ち上げられる。おそらく日本最大の花火大会であるとされている。

花火は「勇壮な娯楽」と書いた人がいたが、実際そのように実感する。今年は10月2日に雄大に行われた。特に「大桜」と言われている種類がいい。ぱっと空一面に円状に広がるのであるが、その直径はおそらく500米はあるだろう。また、その色彩も実に豊かで、見ている人たちの目を楽しませてくれる。大輪が消えようとする直前に、大地を揺るがす「ドン」という音が響き渡り、見ている人の腑に染み込む。また、光と音とのずれを実感する。「大桜」のほかに、「しだれ柳」、「流星」、「牡丹」、「蝶」、「ぶどう」など花火の種類にはそれぞれ愛称がつけられて、庶民に親しまれている。

今年の花火は実に豪華な空中ショーだった。色鮮やかで種類も多い。2時間で2万発を打ち上げるということであるが、単純計算で1分間に175発（<20,000÷120）になり、これは1秒に約3発という計算になる。ある時は間をおいて打ち上げたり、またある時は機関銃を撃つかのように同時に数発も続けて打ち上げられ、数台の太鼓を一斉に叩いているような感じもあった。

日本の花火の技術は世界一らしい。花火の見事な色を出すために発色剤を使う塩素酸カリウムは輸入によるそうであるが、その調合などの技術は日本でしかできないものがあるとのことだ。昔は中国の爆竹の風習や日本の烽火などお祭りや実用に使われていたが、江戸時代から今日まで庶民の楽しみとして愛されている。また、楽しみだけでなく、不景気な経済状況を吹き飛ばし、庶民に活気を与える効果もあるであろう。江戸時代から花火は両国で隅田川沿岸で行われ、庶民は屋形船を浮かべ、飲み食いしながら花火を楽しんだそうだ。今は全国各地で行われているようだ。熱海でも横浜でも、時間的ゆとりがあれば家族や親しい仲間と見に行ってみたいものだ。

戦後も両国の花火は行われていたが、あまりの混雑で遠いところからでしか見られなかったことがある。土浦の地元の人々は車で混雑することが予め分かっているせいか、2、30分歩いて見やすいところに陣取って家族で夕食を食べながら花火を楽しんだり、忙しい人は自転車で近くの場所に行く人も多い。地元の新聞は大きく花火の行事を知らせるが、混雑するので、車は控えるようにという注意書きがなかったのは残念だった。

遠くから花火を見に来る人は常磐線を使って土浦で降り、バスを使わずに駅から歩くのが一番よい。6時から花火が始まるというので、私も筑波から午後5時頃車で出かけた。しかし、途中で大変な渋滞に巻き込まれてしまった。駅の近くに行くには12km しかないのだが、たどりついた時間は9時半にもなっていた。花火は幸いなことに車のフロントガラスを通して見ることができたが、家の影になって見えないまま十数分を過ごすこともあった。

すばらしい花火を見終わってから、交通渋滞のことが気になったので、そのことを書いてみたい。つくばと昔のままの隣接する土浦市との隔たりが依然として大きい。つくば市は筑波大学をはじめ、政府の研究機関が四十数カ所もある研究学園都市である。今から26年前に筑波大学が開学したのであるが、それよりさらに数年前に学園都市計画が実行に移され、国の予算で計画都市が出来上がった。道路が片側3車線で左折するにも交差点が四つ葉のクローバー式になっているから赤信号でも左折が自由にできるので渋滞はない。また中央分離帯には植え込みがしており、対向車のライトが目に入らなくて済む。また車道と歩道との間にも中央分離帯の2、3倍もあるグリーンベルトが設けられ、芝生の中に様々な木が植えてあり、さらに並木は2本ずつまとめて植えてあるので、緑の量は東京の市街道路よりも遙かに多い。歩道も自転車用と歩行者用とが分かれており、歩道だけでもある地方の県道ぐらいの幅があるであろう。

今から30年前、筑波大の前身、東京教育大学の中に筑波新大学創設準備委員会が設けられたが、その委員のお一人に、美術の先生がおられた。その先生は道路計画を美的観点からも案出された。まず、美観を損ねる電柱を立てないことを主張され、その結果、共同溝方式になった。また、並木道を作る際、木と木の間隔を規定の距離よりもずっと間隔を狭め、しかも並木を二本ずつ植えることを主張されその通り実行された。その当時、東京教育大学のかなりの教官や多くのマスコミも筑波への移転は「政府主導」だから反対であるという雰囲気があったことを考えると、よくもここまで世界に誇れる都市作り

ができたものだと感慨深いものがある。東京駅からバスでつくば市に入るとまず豊かな緑に目を奪われる。どこに大学があり、どこに研究所があるのか分からないくらい木々が青々と茂っているのである。

花火の日、私はつくばをドライブするつもりで土浦のダウンタウンに向かった。すると、駅の数キロ前で渋滞に巻き込まれた。しばらくして分かったのは土浦学園線は完全に通行止めにして、車をみんな田舎道の方に迂回するようしていたためである。昔池袋に「開かずの踏切」というのがあったが、その時を思い起こした。土浦に住んでいる友人に携帯で電話したところ、前にも渋滞に巻き込まれたことがあるけれど、我慢するように、というお達しだ。待てども待てども前に進めない。その原因は千束町の交差点にあった。1車線分の幅しかないところに2方向から車がやってくるが、ほとんどの車は右折しようとしているのである。ところが右方向へ進む道路が車で数珠繋ぎになっているため、信号が青になっても車はピタリとも動かない。これは土浦学園線という動脈に当たる上下車線を遮断しているためである。前がつかえているものだから左折したい車も左折できないでおとなしく待たざるをえなかった。

4時間も車に閉じこめられて、子供や老人がいたら、食事もできず水も飲めず、それにトイレにも行けず、さぞかし大変だろうと心配になった。交通は交通を専門に扱う係りがいるはずだ。その渋滞箇所には誰もおらず、ひたすら我慢である。今この原稿を書きながら、9月30日に東海で起きた臨界事故のことを思い出した。会社の上層部は利益追求のことがまず頭にあって、それ以外の声は聞こえない。作業過程を自分たちが都合のいいように変更して、危険な溶液をバケツで運ぶというようなことをやってしまう。交通担当の人達も、熱心に交通整理をするのであるが、それは局部的であって、全体的な車の流れについての把握が欠けているのではないか。車で遠方から花火を見に来る人たちが来るのであれば、車の渋滞をどう解消するかということが第一に考えてもらうべきことだろう。また、ドライバーも花火を見るために運転しているとは限らない。会合、パーティ、見舞い、打ち合わせなどそれぞれ仕事に出かけた人たちも多くいたはずである。動脈を止められ、馴れない細い道に無理に行かされ、4時間以上の渋滞に遭って困った人はかなり多かったのではないかと思う。普通私の車はリッターあたり10km進むのであるが、その時はリッター7kmになっており、4時間以上にわたる10kmの渋滞は相当排気ガスをあたりにまき散らしたことと思う。毎年花火大会は車渋滞の日になるのではなく、市民がみんな楽しめる夕べになってほしいものだ。交通システムのよい見本は隣接しているつくば学園都市のスムーズな車の流れである。“Why not the best ?” と言いたい。

ドイツの親しい友人は日本人の弱点ではないかということを日本の幽霊にたとえて語ったことがある。欧米の幽霊は足があり、靴も履いている。しかし日本の幽霊は足がない。これは日本人の特徴を表しているという。イメージとか直感は鋭いものがあるが、それを具体的に捉え着実に推し進める力は不足している。その力が日本に備わると日本はさらに発展すると言ってくれた。幽霊でなくても日本の墨絵もその傾向にあるのかもしれない。つくば学園都市構造とその実現は、いわば幽霊に靴を履かせたよい例と言えるのではないか。

ある親しいブラジル人が言ってくれたことを思い出す。“It's good to have some room for improvement.” つまり、改善する余地があることはよいことだ、という意味である。物事を考える場合、計画、実行、評価の3つが必要である。幽霊の履く靴は時代の変化に合わせて、サイズを変更していかなくてはならない。ほぼ3ヶ月に1回の割合で変化をしていくパソコンについていくのは大変だが、100年もない人生を、世界市民の一員として瞬間瞬間を充実して生きていくには周りの人たちと協力し合って生きていくのに必要な投資なのかもしれない。

（筑波大学名誉教授）

予　告

いろいろと話題の多い2000年を迎えるにあたり、新年賀詞交換会を以下のように予定しています。多数の皆様のご出席をお待ちしております。

とき：2000年1月7日（金）
ところ：パレスホテル

詳細は追ってお知らせします。

文化厚生委員会

収録地名 世界最多の 225,000 以上！（第 9 版増補改訂版より 15,000 増加）
現在刊行されている どの地図帳よりも詳細なアトラス完成！

世界一の世界地図帳 「完全新版」 新発売！

最新版『タイムズ世界地図帳』ミレニアム版（第10版）

【英語で解説された地球の現在と現地発音に従ったアルファベット地名表記による地図で構成されています】

THE TIMES COMPREHENSIVE ATLAS OF THE WORLD
Millennium Edition (10th Edition)

全 1 巻 定価：33,000 円 (税別)

《体 裁》

■ 総頁数：544 頁（序文·目次: 9 頁、地球の解説: 58 頁、序説·記号·略語表: 5 頁、地図: 247 頁=124 プレート·4 色刷、用語解説: 6 頁、索引: 214 頁、謝辞: 1 頁、空白: 4 頁）
■ サイズ：450×310mm ■ 重 量：4.9kg
■ 用 紙：本文·地図 115 g テクノ紙、索引 90 g アンタレス紙
■ 製 本：表紙 3.5 ミリボール紙、特織黒布張り、表紙と背に銀文字押し、リボンしおり付き
■ タイムズ・ブックス「ハーパー・コリンズ社」1999 年刊 ■ ISBN: 0-7230-0792-6

◎ 全ての地図と資料を全面刷新、原版 (1967 年) 以来の完全新版。
◎ コンピューター技術を駆使した鮮明なディテール描写。
◎ より詳細なデータを伝える前版にない地図 18 点を追加。
◎ 衛星写真イメージ描写による魅力的なビジュアル。
◎ 索引には正確な緯度・経度を記載！ ◎ 地名用語集（英語対訳付）の利用。

現地語読みを採用！

◎『タイムズ・アトラス』の愛称で世界中のあらゆる人々に親しまれている世界最大の世界地図帳が、今世紀最後のミレニアム版（第 10 版）としてこのたび完成致しました。
◎ この版は、これまでのどの版よりも収録地名を増やし、全ての地図と資料を全面刷新し、より詳細に、より鮮明に、より大縮尺に、スケール・アップした「完全新版」です。20 世紀最後の価値ある地図帳を 21 世紀へお伝え下さい。

総輸入発売元 株式会社 雄松堂書店 YP センター
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-42-3 TEL: 03(3943)1300 FAX: 03(3945)6112
❖ 詳細は小社ホームページでご案内中！是非、ご覧ください。☞Homepage: http://www.yushodo.co.jp
❖ 実物大の地図を収録した詳しい内容見本がございます。必要部数をご請求ください。

1999年11月 通巻第390号 日本洋書協会 編集者 高橋 紘
〒103-0027 東京都中央区日本橋1－21－4 千代田会館 5 階20号室 ☎(03)3271－6901 FAX.(03)3271－6920

印刷所＝藤本綜合印刷株式会社